



若者へのメッセージ 55

日本朗読文化協会名誉会長 加賀美 幸子

【第二回】時代を超えて惹きつけられる『更級日記』の魅力

『更級日記』には、作者の身近な生活感溢れる体験が直截に綴られていて、『源氏物語』とは違う意味で共感させられる。作者を取り巻く環境の変化や身近な人との出会い、別れが率直な言葉で綴られていて、時を超えて我々に語り掛けてくるのである。

孝標女からのメッセージ

『源氏物語』は長年読み続けられ、NHKの大河ドラマでも取り上げられるなど、今も根強い人気がありますが、同様に「物語をはやく読みたい！ 読みたい！」と、平安時代の全く同じ時期に懂れたのが『更級日記』の作者菅原孝標女です。

『更級日記』は『源氏物語』とほとんど同じ時代の作品で、『源氏物語』が書かれたといわれる寛弘五年（一〇〇八）年に彼女は生まれてい

ます。

世界に冠たる『源氏物語』とは違う意味で、人々の心に寄り添って読み続けられて今に生きているのが『更級日記』です。

私自身、放送やさまざまな形で『更級日記』に触れてきましたが、いつも孝標女からは多くのメッセージが聞こえてくるのです。人間としての賢さ、賢さゆえのやさしさ、強さや人の見つけ方、人生の見つけ方……。紫式部や清少納言の魅力とは違った、とても身近な、共感させられる何かがあります。

平安貴族の生活

『更級日記』の根底には上総（現在の千葉県）での強く新鮮な環境があります。思いの深い継母や姉、やさしい乳母、そのような人々の中で育ち、触発されました。その大事な時期があったから『更級日記』は生まれたのです。

「世の中に物語といふもののおんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、徒然なるひるま、よひゐなどに、姉、繼母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとゆかしさまされど……」（後略）

父菅原孝標の任期が終わり十三歳の年に、いよいよ都へ上ることになり（今は数時間ですが）三カ月にわたる旅が始まります。

上総の国を出発したあと、下総、武蔵、相模、駿河、三河、尾張、美濃、近江、琵琶湖、そして、師走二日、逢坂の関を越えて、我が家につくのです。

そこから、新たな物語が始まります。しかし共に暮らしてきた仲の良かった継母は「あなたがやさしくしてくれた心は決してわすれることはありませんよ」と孝標女に告げて、翌年（治安

元年（一〇二一）、五つぐらいの自分の子どもをつれて出て行きます。

猶頼め／梅の立ち枝は契り置かぬ思ひの外の人も訪ふなり

「私は逢いに行けないけれども、ほかの誰かが、美しい梅の花に気づいて、あなたに会いに来てくれますよ」

との歌が届きました。さらにその年の春には天然痘が大流行し大事な乳母が亡くなりました。悲しみ嘆いている時、ふと外を見ると、桜の花が散り乱れていました。

散る花も又来む春は見もや為む／やがて別れし人ぞ恋しき

「散る花も、来年には見ることもできるでしょう。でも亡くなってしまった乳母にはまた会うこともできず、悲しいばかりです」

しかし、継母が去り乳母を亡くして悲しみに暮れる中、孝標娘のおは（『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母）から、手にすることができた『源氏物語』五十余巻。その時の気持ち……それはまさに教科書に取り上げられる有名な箇所です。

「はしるはしる、わづかに見つ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうち臥してひき出でつ、見る心地、後の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかの事なければ、……（後略）」

「後の位も何にかはせん」というきっぱりとした言葉から作者の清々しい思いが見事に伝わります。

しかし、宮仕えの話がきても、家事に追われ、亡くなった姉の子どもたちの面倒を見なくてはならず、女房として仕事に活躍することはなく、日々は過ぎて行きます。

宮仕えは、断続的に続きますが、結婚は三十三歳頃だったようです。夫・橘俊道のことはあまり『更級日記』には書いてありませんが、『源氏物語』の光源氏や薫大将のようではないけれど、優しい男性であったのではないかと思います。しかし夫は、作者が五十歳の頃、待ち望んでいた京に近い任地ではなく、当時としては遠い信濃に赴任し、しかも、間もなく亡くなります。

その後孝標女は一人になって、辿ってきた自

らの人生に思いを馳せ、感性豊かな文章で心に留めてきた事々を書き綴ります。

日記の最後の歌は「しげりゆくよもぎが露にそぼちつつ人にとわれぬ音をのみぞ泣く（よもぎは茂りに茂っていますが、私を訪ねてくれる人もなく、そのよもぎの露に私はぬれそぼちながら、声をたてて泣いてばかりいます）」

時代を超えて語り掛けてくる声

恋もお勤めも家族関係も、彼女の思いに添わず、逆に進むばかりの一生ではありませんが、その心を語る声が、あまりにも自然で直截なので、今も分かりやすく、自然で読みやすいのが魅力です。

「なにもかも心になうことなく過ごしてしまつた私です」と彼女は言いますが、時代を超えて人々を惹きつけるのは、そのやさしさと自然な強さに共感できるからでしょうか。

彼女は五十歳をすぎたから『更級日記』の執筆に向かいます。人生を思い書くことが、その生き方であり、その心と文章力が今も私たちに語りかけているのです。

「あつ加賀美さん、今日も私のことを書いてくれている！」と天のどこからか作者の声が聞こえるような気がいたします。